

Title	東洋史論叢(岩波書店発行)
Sub Title	
Author	宮島, 貞亮(Miyajima, Teisuke)
Publisher	三田史学会
Publication year	1926
Jtitle	史学 Vol.5, No.2 (1926. 5) ,p.150(304)- 151(305)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19260500-0150

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

つたのは山陵の整備と、殊には山陵研究の發達に基くのであるけれども、未だ本書のごとく膨大にして且内容の充實してゐるものを見ることはできなかった。それは當然、一部分、近時學界の進歩、就中山陵研究の漸く見るべき旺盛、山陵崇敬思想の開展の事實に、その功を歸せなければならぬであらうことを再言したい。

以上私が「山陵」を手にしての慌しい感想を述べたものに過ぎぬ。進んで本書の嚴密なる批評、評價をするのは只今出來かねる。既に私が著者と意見を異にする箇所も二三あり、又、一般に未だ山陵研究がそこまで進んでゐない故か、研究の總括的意見のない「山陵沿革」とは別に「こと」を殺しいけれども、それらのことは共に後日に譲り後日に期待しやうと思ふ。ここには唯我々が一般的に其案内書の缺乏を感じ、その現出を渴望してゐる時に當つて、山陵に關する本書の如き其案内書を得ることの出來た喜を表現し、そして山陵を崇敬し、之に興味を有ら、その研究に志さうとする人々に本書を奨め、併せて著者に敬意を表するに止める。(美濃版、和装、三冊一帙、定價拾參圓、發行所、赤坂區田町三ノ四山陵崇教會)(和田軍一)

東洋史論叢(岩波書店發行)

われらの待ちに待つた東洋史論叢かよいよ上梓せらるるに至つた。本書は我が國に於ける東洋史學の建設者であり、また其の指導者である東京帝國大學名譽教授文學博士自島康吉氏の遺稿を編纂するため交友門生諸氏が其の遺稿を傾倒し博士の遺稿を呈した論

文集である。われらの欣快の情に堪へざるは勿論、定に學界の大美學といふべきである。執筆者は市村博士桑原博士等二十六氏何れも東洋史學を專攻せらるる知名の士であり、我が慶大からも橋本加藤兩教授が特に執筆せられてゐる。而して本書の主眼は政治經濟哲學藝術宗教神話言語風俗法制等の諸方面に亘り、我が國支那、朝鮮、滿蒙、西域等に關する種々の問題が各其の專攻者によつて検討せられてゐる。

次に本書に收むる論題と其の執筆者とを擧げることとする。白鳥博士遺稿記念東洋史論叢の序に代ふ(市村瓊次郎)後柏原天皇の御即位式に關する研究(淺野長武)日麗通商管見(青山公亮)高麗元宗朝の廢立事件と蒙古の高麗西北面占領(池内宏)敦煌發見「摩尼光佛教法儀略」に見えたる二三の言語に就いて(石田幹之助)支那天文學の組織及び其の起原(飯島忠夫)銅鐸の化學成分に就いて(梅原末治)安西四鎮の建置と其の異同に就いて(大谷勝真)唐宋時代の商人組合「行」に就いて(加藤繁)シヤマン教の世界觀に表はれたる佛教的要素に就いて(園下大慧)明末清初の回儒(桑田六郎)歴史上より觀たる南北支那(桑原隲藏)支那古代殉送の風習に就いて(重松俊章)明初の開墾と莊田の發生について(清水泰次)古代日本の末子相續制度に就いて(白鳥清)朝鮮黨争の起因を論じて(十禍との關係に及ぶ)瀧野馬熊)大金國志に見ゆる愛正の亂に就いて(鳥山喜一)天一について(津田去右吉)古代支那の吳語吳音に就いて(中村久四郎)支那古代の封建制度(橋本増吉)回鶻譯本安慧の俱舍論實義疏(羽田亨)玉蟲翅飾考(濱田耕作)千秋節宴樂考(原田淑人)支那に傳ふる二三の白話に就いて(藤田豊八)蒙古の詐馬宴

と貝孫宴(箭田直)明の太祖の教育勅語に就いて(和田清)

右に挙げた如く、執筆者は何れも現代東洋史學の各方面を代表する學者なるを以て、本書は現時に於ける我が東洋史學の全景を収めた一大縮圖といふべきである。それにつけても、われらは白鳥博士の學界に跡づけられし偉大な業績に、衷心多大の敬意を表せざるを得ない。尙ほ本書に收むる博士の著作年表(自明治二十二年至大正十四年)は、われらをしていたく刺戟せしめ、深く感銘せしめてやまない。編者の勞を深く謝すると共に、敢て江湖に一讀をすすむるものである。(宮島貞亮)

純粹生體「アイヌ人」の口腔器圖特

に齒牙の研究

島峯 徹
金森虎男 共著

大岡山書店發行

アイヌ人に關する我が國人の研究には、小金井博士の人類學上に於けるもの、金田一京助氏の口碑に於けるものがあつて、ともにわが學界に一大寄與をなしたのであるが、しかし、種族の研究はあらゆる方面から試みられねばならぬのであつて、こゝに紹介せんとする本書のときは、從來ほとんど見ることを得なかつた特殊の方面の研究であり、それだけ、また、貴重なるものと言はればならぬ。

本書は島峯金森兩氏が、大正八年及び九年の二回に亙つて、主として日高國沙流郡平取村の奥に住居せるアイヌ人三百十三人の齒牙の研究であつて、殊にその研究の特色とすべきは、その調査人員のこととくが純粹の生きたアイヌ人であることである。

その調査結果によれば、一般にアイヌ人は内地人に比して、口腔諸器官、特に齒牙の状態が著しく健全であつて、その理由は食物、飲料、或は彼等の生活状態、或はその人種的關係等の諸原因によるであらうが、就中その顎骨の發育著しく良好なるためであるといふ。

本書はその所見の忠實なる記述を旨とし、總體的斷定を故意に省略したと言はれるけれども、この種族の形態的研究に對して極めて貴重なる文献をなすのであつて、なほ附録には「アイヌ土人の生活状態として、彼等の顔貌・風俗習慣・その飲食物、口腔部に於けるアイヌ語とその傳説、及び見聞録を記してある。これまた多くの寫真版(附圖A齒牙の圖六十六圖、B風俗及人物の圖五十圖、附表二十七表)とともにアイヌ研究にとつてよき參考である。(松本芳夫)